

大平和弘研究員



全国で新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、ある妖怪に注目が集まっています。「アマビエ」です。アマビエは、今から170年ほど前、現在の熊本県の海に姿を現し、豊作や疫病の流行を予言し、「疫病が流行した際は、自分の姿を描いて人々に見せよ」と告げて姿を消し

ひとはく
研究員
だより

安寧への願いが 息づく妖怪伝承

たといいます。会員制交流サイト（SNS）上にはアマビエのイラストの投稿が急増し、厚生労働省はアマビエがデザインされた感染防止の啓発アイコンを公開したほか、西宮市の廣田神社ではアマビエを描いた護符が配布されるなど、感染の早期終息を願う人々の間で、アマビエの伝承が広がっています。



廣田神社



①廣田神社のアマビエが描かれた疫病よけの護符 ②亡きがらになっても悪疫をまき散らした鶴（ぬえ）（人と自然の博物館所蔵「源頼政鶴退治之圖」より）

「人魚」が知られています。筆者が調査に入った沖縄県石垣島では、漁師の網にかかった人魚が津波を予言したため、信じた村人は高台へ逃げて助かったとされる伝承が残っています。科学的な関連性は否定されていますが、深海魚などの珍しい生物の出現が天変地異の前兆とする伝承は各地で見られます。自然界の異変を察知して備えるという、自然と寄り添った暮らしの知恵を今に伝えているかのようです。

多くの妖怪たちは、地域の不可解な出来事や、自然災害、悪疫などの災いを回避するために、広く後世まで伝える手段として生み出されたといえるのかもしれませんが。電話やインターネットもない、人に伝える手段が限りなく少ない昔の人々にとって、恐ろしい話話だけではなく、時にアマビエのようなユーモアな姿形をした妖怪たちが、多くの人に波及する（現在でいう「バズる」）力の源になっていたのではないのでしょうか。いつの世も、妖怪の伝承には、人知ではどうすることもできない災いに対し、暮らしの安寧を願う人々の心が息づいているのです。

一方で、妖怪自体が災いをもたらす伝承の方が多いかもしれません。当館所蔵の「撰津名所図会」（1796〜98年）などでは、平安時代に京都で源頼政（みなもとのたかまさ）によって退治された「鶴」の亡きがらは、木船で鴨川を下り、大阪湾へ流れ出て芦屋の浜に漂着したとの説話があります。亡きがらになっても悪疫をまき散らしたため、村人が塚を築いたとされ、現在でも芦屋市の芦屋公園では「ぬえ塚」をみる